American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケイプ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル
イラストレイション=花井祐介

第33回

ヴァン・モリスン「セント・ドミニクの予言」

故郷での紛争解決の未来を異国の教会に見る

Van Morrison
"Saint Dominic's Preview"
Warner Bros.［UK］●K46172
［1972］⇒Polydor［UK］
◎5374512

このコラムに、なぜアイルランド人のヴァン・モリスンの曲が出てきたのか、不思議に思っている人もいるだろう。実はヴァンは70年代前半に、サンフランシスコからゴールデン・ゲイト・ブリッジを北に渡ったマリン・カウンティー郡の町サンアンセルモに住んでいた。その街の名前は、『セント・ドミニクズ・プリヴュー（セント・ドミニクの予言）』（72年）の次に彼が出した『ハード・ノーズ・ザ・ハイウェイ（苦闘のハイウェイ）』（73年）の中の曲名にもある。1曲目の「スノウ・イン・サンアンセルモ」だ。彼はその町に住んでいるときに、何枚かのアルバムを作った。だから今回のテーマに選んだんだ。実は今回の曲には、はっきりした物語はない。メロディーに合う、イメージ的な言葉を乗せて作ったようだ。

Shammy cleaning all the windows
Singing songs about Edith Piaf's soul
And I hear blue strains of "no regredior"
Across the street from Cathedral
Notre Dame

このヴァースでは、ヴァンの子供の頃を歌っている。≪シャミーを使って全部の窓を掃除している≫。この'shammy'とは、シャモアという、ヨーロッパの山に住むヤギ／カモシカ種の動物の革のこと。非常に滑らかで水を吸収するため、車のボディーを磨くためによく使われるんだ。≪エディット・ピアフの魂を歌いながら。"no regredior"のブルーなメロディが、ノートルダム聖堂の前の道を渡ったところから聞こえてくる≫。この"no regredior"とは、きっとピアフの名曲「水に流して（Non, Je Ne Regrette Rien）」のことだろう。

Meanwhile back in San Francisco
We're trying hard to make this whole thing blend
As we sit upon this jagged
Storey block, with you my friend

このヴァースでは、ヴァンがサンフランシスコに住もうとやって来たときの情景を歌っているのだと思われる。≪話かわって、一方サンフランシスコだ。ここでは、暮らしをすべてうまくやっていこうと努力している≫。この'blend'は、うまく混ぜよう＝うまくやろう、という意味で使われている。≪ボロボロの〝ストーリー・ブロック〟の上に、友達のあなたと座っている≫。'storey＝story'とは、建物の階層のこと。'10 stories'なら10階建てになる。'block'とは都市の街区／区画のことだ。恐らく、古い高層アパートのような建物から、街を見下ろしているんだろう。

And it's a long way to Buffalo
It's a long way to Belfast city too
And I'm hoping the choice won't
blow the hoist
Cause this town, they bit off more
than they can chew

≪バッファローまでは遠い。ベルファスト・シティまでも遠い。そして、僕はこの選択が正しかったことを願う≫。'Baffalo'はニューヨーク州の都市、'Belfast'はもちろんヴァンの故郷である北アイルランドの首府。ここでの'choice'は、彼がこれから住もうとしている場所選びのことだ。'I'm hoping the choice won't blow the hoist'の直訳は＜起重機を壊さないことを願う＞となるが、ここでは、自分の選択が正しかったのかを悩む心情を表わしている。次の'bit off more than they can chew'の直訳は＜噛める以上に噛み切ってしまった＞ということになるが、つまりは、自分の限界を超えてしまったのではないかと頭を悩ましている様を歌っている。

As we gaze out on, as we gaze out on
（×2）
Saint Dominic's Preview（×3）

ここからサビだ。≪我々はセント・ドミニクの〝予告〟を眺めている≫と繰り返す。'Saint Dominic'は、サンフランシスコのパシフィック・ハイツにあるカトリック教会だ。ヴァンは、この教会が60年代前半から98年のベルファスト合意まで続いた北アイルランド紛争への平和のミサを行なっていることを新聞で読み、詩にその名前を入れたようだ。'preview'の意味は＜予告＞だが、ここでは＜先を見る＞といったニュアンスで使われている。つまり、この教会でアイルランドに平和が来るのを予見したというわけだ。これがこの曲のテーマだ。

All the orange boxes are scattered
Against the Safeway's supermarket in
the rain
And everybody feels so determined
Not to feel anyone else's pain

≪雨の中、スーパーマーケットのセイフウェイの壁のあたりには、オレンジの箱がたくさん散らばっている≫。'Safeway'は、北カリフォルニアに本社があるアメリカで2番目に大きいスーパーのチェーンだ。アイルランドには、1795年に結成されたオレンジ・オーダーというプロテスタントの政治運動の党がある。サンフランシスコは雨が降ると強い南風が決まって吹くから、スーパーの壁に積まれた箱が崩れた様を歌っているのだろう。詩にオレンジの箱を入れたのは、政治運動を連想させるためでも

●ジョージ・カックル／GEORGE COCKLE　ラジオ・パーソナリティ。1956年、鎌倉生まれ。

ある。そしてそのプロテスタントとカトリックが激しく対立する政治運動のせいで、アイルランドの人々はその苦しみさえ自覚できないほど苦しんでいた。

No one making no commitments
To anybody but themselves,
Talking behind closed doorways,
Trying to get outside, get outside of empty shells

《誰もが自分のためにしか公約をしない。自分のことしか考えていない。人々は閉まったドアの中で話している。本当は外に出ようとしているが出れないんだ。貝の殻の外に》。'empty shells' は、自らを閉じ込めているということだ。

And for every cross-cuttin' country corner
For every Hank Williams railroad train that cried
And all the chains, badges, flags and emblems
And every strain on every brain and

every eye

1〜4行には解釈できない言葉が並ぶ。今後の課題とさせてください。5〜8行では、再び北アイルランド問題のことが出てくる。チェーンやバッジ、旗、紋章は、すべて政治運動を連想させる。そして、《すべての人々の頭や目に負担をかけるものだ》と歌う。この後、もう一度サビが繰り返されるが、今回は《あの男を見ろ、バンドを見ろ》というヴァンのシャウトが入る。

All the restaurant tables are completely covered
The record company has paid out for the wine
You got everything in the world you ever wanted
Right about now your face should wear a smile
Do you know what I mean?

ここからは、ヴァン自身が有名人になってからの生活を歌っている。《レストランのテーブルはたくさんのもので埋め尽くされている》。この 'covered' には、おごるという意味もある。《レコード会社はワインをご馳走してくれた》。'paid out' は《払った》という意味だ。《この世で欲しい物を全部手に入れたあなたの顔は、今頃は笑顔になっているはずだ。分かってくれるだろう?》。レコード会社にちやほやされている自分の姿を自嘲的に歌っている。

That's the way it all should happen
When you're in, when you're in the state you're in
You've got your pen and notebook ready
I think it's about time, time for us to begin

《あなたがその状況にある時は、その通りになるはずだ》。これはつまり、いい時はいいことが起こり、悪い時には悪いことが起こるということ。《あなたはノートとペンを用意している。もうなすべきことを始める時間だ》。自分を見つめ直して、これまでとは違うテーマで曲作りに取り掛からねばと、自らを叱咤しているのだろうか。

And meanwhile we're over in a 52nd Street apartment
Socializing with the wino few
Just to be hip and get wet with the jet set
But they're flying too high to see my point of view

そしてこの詩はもう一度、昔に戻る。ヴァンは52番街のアパートにいる。52番街はニューヨークのマンハッタンを横切る、長さ3100メートルの一方通行道路のあたりのこと。かつてたくさんのジャズ・クラブがあった。《〝ワイノ〟の何人かと付き合っている》。'wino' はあまりいい言葉ではない。ヴァンはワインを飲む人という意味で使っているけど、アル中や酔っぱらいを指すからだ。《ただヒップになって〝ジェットセット(ジェット機に乗り世界中を回る人たちのこと)〟と一緒に酒を飲むために》。ヴァンはこの 'jet set' の人たちを皮肉っているんだ。でも、彼らは高く飛び過ぎて僕の意見は見えてないと歌っている。

(chorus repeat)
See them freedom marching,
Saint Dominic's Preview
Out in the street, freedom marching.
Saint Dominic's Preview

《自由の行進が見える。ストリートでは自由のためにデモをしている。セント・ドミニクの予告…》

この歌でヴァンは、アメリカ生活での苦悩と、その中で見出した北アイルランド紛争解決への予感を歌っているのだと思う。実は僕も70年代、セント・ドミニクのすぐそばに住んでいた。友達とセント・ドミニクの前に座り、レコード・ジャケットのヴァンと同じポーズで写真を撮ったこともあった。でもこの記事を書きながら気づいたのは、ヴァンはセント・ドミニクの前では写真を撮ってないことだ。ジャケット写真の教会は、彼が当時住んでいたサンアンセルモにある。サンフランシスコ神学校の中にあるモンゴメリー・チャペルで撮影したようだ。40年かかったが、自分の勘違いが判明した。ちょっとすっきりした。RC

SAINT DOMINIC'S PREVIEW Words by Van Morrison Music by Van Morrison
©1972 (Renewed) by CALEDONIA SOUL MUSIC All rights reserved. Used by permission.
Print rights for Japan administered by YAMAHA MUSIC PUBLISHING, Inc. 日本音楽著作権協会(出)許諾第1216216-201号